

献 辞

伊伏彰教授がこの3月末をもって本学を退職されることになりました。定年まで1年間を残しての退職ですが、伊伏先生が本学に講師として就任された1967年から31年間の長きにわたる本学への貢献、とりわけ商経学科のためのご尽力とご功績に感謝して、この『商経論叢』第47号を伊伏彰教授記念号として先生にお贈りすることにいたします。

伊伏先生はその温厚篤実な人柄によって教職員一同から敬愛され、信頼されてきましたし、その着実にひたむきな研究姿勢によって商経学科の若手教員たちの学問研究を刺激し続けてきました。そして愛情と熱意と工夫にみちた教育により学生たちに「自分はたしかに成長できた」という手ごたえを感じさせ、同僚の多くがうらやむほど学生たちに慕われておられました。伊伏先生が研究者・教育者として本学で過ごされた31年間は、先生本人にとっても内容豊かに充実した年月であったことでしょうし、先生をとりまく人々も先生と接した一瞬一瞬が意味に満ち満ちた幸せな時間であったことを記憶にとどめているはずです。

伊伏先生にとって唯一残念なことは、先生のご在職中に本学の4年制大学への昇格が実現しなかったことです。鹿児島県が時代に即応した高等教育サービスを県民に提供しようとするならば、もはや短期大学という枠組みでは不十分であり、本学の4年制化、さらには大学院の設置をも展望せざるをえない。伊伏先生はそのように認識され、新しい大学のビジョン構築作業の先頭に立たれて、本学内外の各方面への積極的な働きかけをおこなってこられました。同時に、商経学科が新しい時代にふさわしいカリキュラムの再編に取り組むさいにも、進んで自らの教育研究課題を組み立て直すことにご努力なさいました。これはけっして容易なことではありません。敬服にあたいすることがらであります。商経学科の最長老という位置にありながら、その謙虚な物腰はいつも変わることなく、その懐の深さを知れば知るほど年下の教員たちはますます敬愛の念を深めてまいりました。大学改革のためにはまず在職する教員が全体とし

て教育研究の力量を向上させてゆかねばなりません。伊伏先生はそれを声高に主張されるのではなく、黙々とひたむきに自己革新を重ねられるその姿そのものによって周囲に垂範されました。

しかし、伊伏先生をはじめとする商経学科教員たちのアイデアは、設置者によって共有されることなく、したがって本学は短期大学のまま 21 世紀を迎えようとしています。鹿児島県は、かつて先見性と進取の気風にあふれる偉人たちを輩出し、そのことを今でも県の誇りとしているだけに、県が設置した本学の抜本的な改革が進まず、九州の他県より一歩遅れをとっている今日の事態は伊伏先生にとって残念のきわみでありましょう。

伊伏先生は懇願されてやむなく鹿児島経済大学へお移りになりますが、本学を愛するお気持ちはこれからも変わることがないでしょう。商経学科が鹿児島経済大学と競合しつつ、ともに大きく発展していくよう、今後も先生には力添えをお願いし、あわせて先生ご自身のご健康と転出先でのご活躍を心からお祈りいたします。

伊伏先生、長い間ご苦勞さまでした。ありがとうございました。

1998 年 2 月

商経学科長 齊藤 悦則